

Title	切支丹の復活(浦川和三郎著, 日本カトリツク刊行會發行)
Sub Title	
Author	吉田, 小五郎(Yoshida, Kogoro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.4 (1928. 12) ,p.165(631)- 166(632)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281200-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書

評

切支丹の復活(浦川和三郎著)

私に若し近頃如何なる書に於て最も感動を受けたか、と問はれるなら、私は躊躇する所なく『切支丹の復活』と答へるであらう。

浦川和三郎師の手になる『日本に於ける公教會の復活』前編は既に、大正四年に發刊されて居り、私が始めて其書に接したのは大正九年の春のことであつた。たまく神田の三才社で此本を見出し、下宿の二階に持ち歸つて夜もすがら之に読みふけり東の空の白むのを知らなかつた感激は今に忘れ難い。更に同書の例言によつて *Francisque Marquis* 師の *"Religion de Jésus ressuscitée au Japon"* といふ本のあることを知り、やがて座右に備へるを得、辭書を便りに拾ひ読みをした記憶もなほ新である。爾來後編の刊行近きにありといふ噂を屢々耳にして今日に及んだ。

昨年暮に『切支丹の復活』前編として世におくられたものは、正しく前述の『日本に於ける公教會の復活』前編に増補訂正を加へたものであつて、去る十月初めに出てたものは即ち其後編である。前編六一九頁後編九四六頁の大著である。

日本に於ける基督教の歴史は、之を凡そ四期に分つことが出來よう。第一期宗門興隆の時代(ザザイエー來朝より太閤の全盛時代

まで) 第二期—衰滅の時代(太閤の末期より島原亂まで) 第三期—剿滅潜伏の時代(寛永末年から徳川氏末期まで) 第四期—宗門復活の時代(幕末以降) 之である。而して近時之が研究は一種の趣味流行と見ゆるまでに盛てはあるが、その對照とするところは主として前二期、即ち宗門興隆及び衰滅の時代に限られてゐるかに見える。剿滅潜伏の時代竝に復活の時代の研究に至つては寧々として暗夜に星をのぞむが如くてある。その中にありて吾人の注意を引くものは先頃出てた姉崎博士の二名著『切支丹宗門の迫害と潜伏』『切支丹禁制の終末』及び『切支丹の復活』であらう。而して姉崎博士の『切支丹禁制の終末』と此の『切支丹の復活』とは骨肉の關係にある。殆んど完全に近い禁教政策によつて剿滅し切つたと思はれた『よかん』の群が不思議にも迫害の嵐の中を堅く信仰を守りつゝけ、之が往時彼等の祖先に教を授けた耶穌會その他の宣教師とは全く別の方から來れる宣教師即ちペリーの外國宣教會の人々によつて明るみに出される顛末を述べたものである。姉崎氏のは主に記録文書をたより、浦川氏のも勿論記録文書が多く材料とはなつてゐるけれども、更に吾人にとって尊く思はれるのは現存する被迫害者の實際談を多く取り入れてあることである。故に姉崎博士の著と合せ讀めば宛らに當時の實景を血の温さをもつて目前に覺えし得るのである。

さて自分はこゝにその目次の大要を次に記す。

第一章禁教頬末 第二章琉球時代 第三章開國前後 第四章舊信徒の發見 第五章種ならぬ雲行 第六章小島事件 第七章明治政府と切支丹(以上前編)

第一章 各藩の切支丹迫害 第二章 浦上切支丹の總流罪 第三章
旅の話 第四章 默許時代 附錄 ((一) 浦上外海五島地方に傳は
りし新詩文ならびに年中行事 (二) 浦上の記念碑)
その他挿書地圖 前編後編合せて三十六

全編殆ど、どの頁を讀む時も私は之を冷靜に讀み續けることが出來なかつた。自分は幾度か巻をおいて瞼の熱くなるのを覺えた。殊に琉球滞留十八年間の苦心、舊信徒發見の顛末、各藩の迫害、浦上信徒の總流罪、旅の話等に實に小説よりも奇なる話が至るところに讀まれる。牢破りの話や、枕の中に證據を見つけた肉親の切支丹を訴へ出る話、監禁された信者にあてがはれた握り飯の上前をはれる話や、六尺に三尺の牢に十六人も入れられた話や、生き乍ら蛆虫にかまれる話や、牢内で衰弱の爲髪がぬけおちてお岩のやうな姿になる話、棒責、算木責、ありとあらゆる責苦にあつてなほ平然とその信仰を貫く者、苦しみに耐へずして轉ぶもの、再び立ちかへる者の話等々話はつきない。

最後に特に加へておきたい事は、この著者が天主公教會の司祭にして長崎神學校の教授であり又『イグナシオの心靈修業』『通俗耶穌基督傳』『舊教のはなし』修道者の心得』『基督信者寶位』『吾主の御苦難』等幾多のカトリック教書類の著者だといふことである。私が何故特にとりたてゝかくいふかといへば、日本に於ける切支丹研究にたゞさはる者の殆んど總てがカトリック教そのものに理解を缺き、從つて其研究には大いなる缺陷が供ふ。之に反しかかる方面に造詣ある人々の間に、又比較的歴史研究が等閑に附せられてゐるかに見える。(主に雑誌カトリック及びカトリックタイ

クスを通じて) その中にありて浦川氏今回の業蹟は特筆大書する價値があると思ふのである。又浦上その仙長崎港外の諸島に年久しい迫害の嵐をくぐりわけて來た信者、若しくはその子孫の人々は未だ舊來の祕密主義を守つて容易に口を開かぬと聞く。浦川師は幸に天主公教會の司祭にして長崎神學校の教授、恐らく如何なる人々よりも彼等の話を聞くに便宜があるに違ひない。あれを思ひこれを思うて此の『切支丹の復活』は近頃の好著たるを失はない。忽卒の間に心せはしく書いた此の一文は、徒らに長々しくのみあつて意をつくさず、師の業蹟を穢はせぬかと恐れつゝ搁筆する。

(吉田小五郎)

西洋文化史講話(紀元社發行)

文化史の取扱ふべき問題は、頗る廣い範囲に亘るが、文化史として一貫した叙述を行ふ場合には、自らその對象に制限を附すべきであつて、本書の著者がそれを政治、經濟、宗教、學問、藝術の五部門に限定したのは當然である。また文化史は漫然たる事實の羅列では意義がない。各時代の複雜な文化現象の中に、一貫した時代相もしくは、時代的精神性を見出して、各時代を特色づけることは、文化史の重要な任務である。著者は此の時代相の研究に最も意を用ひ、凡そ左の如き着眼點を持つて、古代及び中世を此の一卷に收めてゐる。

先づ筆を埃及に起してこれを「黎明時代その一」とし、轉じて西アジヤの文化を敘し「黎明時代その二」とする。前者に於ては